

日本には、四季を彩る美しい言葉がある。春には春の、夏には夏を表す言葉がある。「春」と聞いて、皆さんはいくつ言葉を挙げることができるだろうか。「ひな祭り」や「入学式」といった行事や、「春一番」や「菜の花」といった自然の事物を挙げた人もいるかもしれない。だが、春と言えばやはり「桜」を挙げた人が多いのではないだろうか。

とにもかくにも私たちは「桜」が好きだ。春になると「桜前線」や「開花予想」といった出来事がニュースで放映される。毎年、天気予報と同じように開花時期が予想され、開花の様子をニュースとして報道されるのは、桜をおいて他にない。なぜ私たちは桜に魅了されるのだろうか。

私たちと桜の関わりは非常に古く、『古事記』や『日本書紀』といった神話の時代から「咲き栄える花」として、そして「はかなく散る花」として描かれてきた。そして、農耕民にとっては春の訪れを告げる花であり、種まきの時期を知らせるありがたい花として大切にされてきた。

一方、奈良時代になると大陸文化の流入によって、中国で好まれた香り高い「梅」が貴族にとっての花となった。しかしながら、時代を経るにつれ、花は「梅」から「桜」へと再び変化する。これは、平安京の紫宸殿に植えられた梅が桜に植え替えられたことから言える。この紫宸殿がモデルとなった「ひな人形」は、現在でも「左近の桜・右近の橘」として桜が飾られている。

江戸時代後期には桜にとって大きな変化があった。現代の私たちにとってなじみのある「ソメイヨシノ」が品種改良によって誕生した。「ソメイヨシノ」は花だけが先に咲き、そして一斉に散るといふ、言わば私たちにとっての桜のイメージを体現したような花だ。この「ソメイヨシノ」は一本の木から接ぎ木で広まった桜である。一本の木をもとにして全国に広まった「ソメイヨシノ」は同じ性質を持っており、気温などの条件によって一斉に開花する。そのため、桜の開花予想が立てられるのも、同じ木から接ぎ木で広がったという性質があるからだ。

これらのことから、桜はどの時代も人々の暮らしに密着し、人々と共に存在しながら受け継がれてきた歴史が存在していることが分かる。ここに私たちが桜を愛でる理由があるのではないだろうか。

桜の蕾の時期から開花を心待ちにし、咲いては木の下に集い、桜を愛でる。そして、散りゆく様に目をやって、惜別の情を抱く。春の一時期だけしか見られないにも関わらず、私たちの心を揺さぶる桜。私たちは昔から桜と共に生きてきた。私たちの桜を愛でる心は今も昔も変わらないものである。



問題



この文章の結論の説明として適切なものを次の3つから選びましょう。

1 日本を象徴する四季のうちろいの中で、春が始まりとなり桜がそれを象徴する樹木である。

2 桜はどの時代でも人々の暮らしと密接なかわりがあり、桜を愛でる心は今も昔も変わらない。

3 桜は開花期間が短く、はかない命であるため日本人は同情にも似た感覚を持っている。

